

# 白氏文集 四十二 琵琶行 (五)

加藤淳平

樂天、女の演奏を聴き、長江岸の僻地に謫せらるる身を感じ、涙して「琵琶行」を賦す。

琵琶行 (五)

琵琶行 (五)

我從去年辭帝京

我去年 帝京を辭してより

謫居臥病潯陽城

謫居して 病ひに臥す 潯陽城

潯陽地僻無音樂

潯陽 地僻にして 音樂無し

終歲不聞絲竹聲

終歲 絲竹の聲を聞かず

住近滄江地低濕

住むは滄江ぼんかうに近く 地は低濕

黃蘆苦竹繞宅生

黃蘆くわうろ 苦竹 宅を繞りて生ふ

其間旦暮聞何物

其の間 旦暮 聞くは何の物ぞ

杜鵑啼血猿哀鳴

杜鵑血に啼き 猿は哀しく鳴く

春江花朝秋月夜

春江の花の朝 秋月の夜

往往取酒還獨傾

往往にして酒を取り 還また獨り傾むく

豈無山歌與村笛

豈 山歌と村笛の無からんや

嘔啞嘲晰難爲聽

嘔啞嘲晰おうあくてうせつ聽くをなし難し

今夜聞君琵琶語

今夜 君の琵琶を語るを聞けり

如聽仙樂耳暫明

仙樂を聽くが如く 耳暫らく明かるし

莫辭更坐彈一曲

辭するなかれ 更に坐して一曲を彈ずるを

爲君翻作琵琶行

君が爲に 翻へつて 琵琶の行を作らむ

感我此言良久立

我が此の言に感じ 良久やしく立ち

却坐促絃轉急

坐かに却り 絃を促しむれば 絃轉うたた急なり

淒淒不似向前聲

淒淒として 向前の聲に似ず

滿座重聞皆掩泣

滿座 重ねて聞きて 皆泣なみを掩ふ

座中泣下誰最多

座中 泣下ること 誰か最も多き

江州司馬青衫濕

江州の司馬 青衫うる濕ほふ

(大意) 去年都から左遷されて以來、私はここ潯陽城に住み住まひをしながら、病ひに臥して來た。僻地の潯陽に音樂は無く、一年中管弦の演奏を聴かない。住む家は滄江ぼんかうに近く、湿氣の多い土地であり、周圍に黄色い蘆や苦竹にがたけが生ひ茂る。その間、朝夕聞こえて來るのは何か。杜鵑ほととぎすが血を吐くやうに叫び、猿が哀しく鳴くだけである。長江の岸邊に花が咲き亂れる朝や秋の月が照らす夜には、時に酒を取り寄せ、一人で杯を傾けた。山人の歌や村人の吹く笛が無い譯ではないが、大聲でわめき、低聲で呟くだけで聴くに耐へない。今夜あなたが琵琶で歌ふのを聞いた。この世ならぬ音樂を聴いたかのやうに、耳は暫らく澄明になった。さあ斷はらないでもらいたい、もう一度坐つて一曲弾くことを。さうすれば私は考へて、琵琶行の詩を作らう。女は私のこの言葉に感じて暫く立つてゐたが、やがて坐り直して

絃を締めると、絃が急に鳴り始める。凄然たる演奏は前と異なる。満座の人々は重ねて聞いて感動し、涙を手で覆ひ隠したが、涙を誰よりも多く流したのは、江州司馬のこの私。青い上着がしとどに濡れた。

(平成三十一年四月二日受附)